

週日の説教

金 大烈 神父 2008年6月19日(木)

《父である神様の御旨に従い、許しあいましょう》

今日、皆さんと分かち合いたいことは、二つの言葉についてです。一つは“私たちの父”、そしてもう一つは、“許し”という言葉についてです。

私は子どもの頃、主の祈りの中の“私たちの父”という言葉がものすごく気に入っていました。神様に対して、一番完璧で単純、そしてその意味を分かりやすく表現している言葉だと思います。そして青年になってからは、“誘惑に陥らせず”という祈り。司祭になっていろいろな人々の難しさを見てからは、“今日の日ごとの糧をお与えください”という言葉が目に入りました。そして全体的にいつも気に入っている言葉は“私達がある人を許したように私たちの罪も許してください”という言葉です。

神学者達は、神様について、いろいろ説明、解釈をしようと理論を作って出してきました。昔からいろいろな神様について様々な解釈や解説が出ています。しかし、イエスさまが紹介してくださった神様の存在は、神学者達が述べたような複雑で難しい単語は全然使わないものでした。簡単明瞭で子どもが聞いても、お年寄りが聞いても、病人が聞いても、健康な人が聞いても分かりやすい言葉でした。それは“私たちの父”という言葉でした。

皆さまは、神様のことを本当に父、お父さんだと思っているのでしょうか？ もちろん親からいろいろな傷を受けた人、特に父親から傷を受けた人にとっては、お父さんのイメージは辛い思いを起こさせるかもしれませんね。しかし一般的に父といえばそれは柱であり、私たちをいろいろなことから守ってくれる屋根のような、そして山のような、そしていつも私たちを見守ってくれる、そういう存在のイメージです。

私もそうです。子どもの頃から父がいる時といない時では全然気持ちが違います。“私たちの父”。私だけの父ではなく、私たちの父。このあたりは完璧な表現だと思います。それをよく黙想してみますと、自分が嫌っている人も自分の父に対して“自分の父”と思っている。そう考えると自分でも知らないうちに寛大な気持ちになれる気がします。

私たちにとったら神様は父です。狐やたぬきや蛇のような小さなものではなく、あらゆる力を持ちながらもいつも譲る姿の父。父には、何でも頼むことができます。過ちがあっても自分の息子や娘を見るような心で私たちを見ていてくださいます。そういうことを私たちの心に意識させられれば、率直な許しの準備が出来ると思います。論理的に考えて、父はこういう存在、こういう存在だといってしまうと、純真な心で近づくことが難しくなります。私達が信じているイエス様は、御言葉の中で、神様を信じ、人を許すようにと言っています。

2番目は、喜びの中での許しということ。イエスさまが教えた主の祈りの中では、まず、この世の中が御国のようになるように、神様の御旨がこの世の中でなすとげられるように、と神様のことを考える祈りがあります。そして日ごとの糧、誘惑に陥らないように、が最後。その前に、私達が、負い目を持っている人を許したように、私たちの罪・負い目をお許しくださいという祈りがあります。

なぜイエスさまが許しという単語を入れたか、私たちは考えるべきではないかと思います。結局一番難しい言葉です。そしてある意味で一番やさしいことです。しかし一番やさしいことでありながらも私たちはそれが上手くできなくていつも自分を壊しているのではないのでしょうか。

少し違った目で見してみましょ。すると、何でもないこと、記憶にも残らないようなことに命をかけて怒りを表す自分の姿が見られます。そうしたら、私たちは死ぬまで神様の前では赤ちゃんだなという気持ちがします。

いつか私は、日本の教会で時間があれば、主の祈りの日本語の訳を変えたいと思います。「私たちの罪をお許してください、私たちも人を許します」。これは逆な解釈です。これでは、条件つきです。「あなた方が許さなかったら私の父である神様はあなたを許さない」という注意と説得がイエスさまの訴えです。それなのに、「私たちの罪を許してください、そうしたら私も許します」となっています。なぜこのような解釈が出ているのか分かりません。聖書の中でも「負い目を許しましたように私たちの負い目も許してください」ときちんとして書いてあります。

私たちは必ず罪の中で生き続けます。だから、必ず許されなくてはなりません。お父さんである神様には、「あなたが先に他の息子、娘達の罪を許したから私も父の心であなたを許す」と言う願いがあるのではないかと私は思います。結局いろいろなことにより、憎まれる人より憎む人のほうが辛くなります。こういう簡単な心理について私たちは悟りながら意識的に練習する気持ちが必要ではないかと思っています。

今も私は神様に特別に感謝することがあります。それは遺伝的なことではないかと思っています。個人的な告白になりますが、皆さまに話してもよいのではないかと思っています。私が生まれてから、父が神様のもとに呼びかけられるまでの間に、父が人を憎む姿を一度も見ることがありません。それは本当に不思議でした。政治的なこと、家族的なこと、いろいろなとんでもないことで、父が人から責められるところをよく見てきました。お酒は飲みました。でもすぐに自分の部屋に行って祈る姿を見せてくれました。母と私たちは、「お父さんはそんなふうと言われて腹が立たないのか」と言い、私たちのほうが腹を立てました。しかし父は、本当に死ぬまでそういう姿を見せてくれませんでした。それが意識的なものか、生まれつきの神様からの賜物なのか、それは分かりません。私も人間ですから憎んだ人はいます。しかしそれが頭に残っていない。そして振り返ってみると本当に憎んでいる人がいるか覚えていない。これは神様からいただいたよいところだと思います。相手はわたしを避けようとするけれど、私には、あの人はなぜ私を避けようとしているのか、と不思議に思われるくらい、すぐに忘れてしまいます。ですから適当に頭が悪いこともよいことです。

とにかく皆さま、私たちに憎しみがなければ、今より3分の1くらい減らすことができれば、この世の中は変わると思います。ですから信者である私たち、神様の御旨をはっきり分かっている私たちから少しずつ許しあう模範を見せようとするのが大事なことだと思います。

ありがとうございました。